

大学生アスリートの進路選択における自己効力感と結果期待

University student athletes' self-efficacy and outcome expectation in career choice

静岡産業大学経営学部心理経営学科

高城 佳那

TAKAGI, Kana

Shizuoka Sangyo University

Department of Management Psychology

Faculty of Management

環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科

藤田依久子

FUJITA, Ikuko

International Pacific University

Department of Early Childhood Development

Faculty of Education for Future Generations

順天堂大学スポーツ健康科学研究科学部

三倉 茜

MIKURA, Akane

Juntendo University

Faculty of Health and Sports Science

静岡産業大学経営学部スポーツ経営学科

館 俊樹

TACHI, Toshiki

Shizuoka Sangyo University

Department of Sports Management

Faculty of Management

Abstract : The purpose of this study was to clarify the feature of student-athletes' ability for choice career to comparing their career decision-making choice self-efficacy(CDMSE), outcome expectation, and career choice behavior with non-athlete student. We targeted 464 students (student-athletes: n = 304, non athlete-students: n = 160) from 2 university in Japan. We could find that student-athletes had lower outcome expectation than non-athlete student. Furthermore, it was clarified that student-athletes had few experienced to have career-choice behavior. These results showed that student-athletes spent their school-life for athletic activities (ex. Training or teams), and couldn't have their interests in their job hunting and enough time for it. We have to clarify the source of CDMSE and outcome expectation of student-athletes more detail to effective support for them to career choice.

Keywords : Career decision making self-efficacy, Outcome expectation, Student athletes

1. 緒言

近年、大学スポーツへの注目が高まっている。2019年3月には「一般社団法人大学スポーツ協会（以下、UNIVASとする）」が設立され、大学スポーツの振興による人材育成、大学ブランドの強化や競技力向上を目指している（UNIVAS, online）。日本スポーツ振興センター（以下、JSCとする）によると、2010年以降の国際大会に出場した日本代表選手の大学進学率は72.9%であり、多くのアスリートが大学に進学していることから、大学はトップアスリート育成の中心的役割を担う機関であり、今後ますますその重要性が高まっていくと考えられる。その流れに伴い、スポーツを利用した大学入試が増加している。旺文社の調査によると、36.7%の大学がスポーツ推薦入試を実施していることが明らかとなった（旺文社、2019）。スポー

ツ推薦入試のはじまりは、1948年の新制大学が順次設置された頃から競技者に対する入試の優遇措置が取られており、この頃から大学はアマチュアスポーツ発展の中心的役割を担っていたと小野ら（2017）は指摘している。

一方で、大学スポーツや大学生アスリートが直面する課題への議論も尽きない。大学スポーツが盛んな北米では、学業と競技活動との両立ができず、大学を卒業できないという問題も起こっている。日本でも同様に、UNIVAS設立構想段階から学生アスリートの学業問題については多く議論されているにも関わらず、具体的な学習支援については各大学に丸投げされている、と問題点が指摘されている（中村、2017）。

また、大学卒業後にも継続して競技活動を行うことができる者はほんの一握りであるため、多くの大学生

アスリートは学業、競技活動に加え、大学卒業後のキャリア選択、就職活動にも取り組まなければいけない。日本でも以前からトップアスリートを中心としたセカンドキャリア・デュアルキャリアについて懸念されており、スポーツ振興基本計画の頃からトップアスリートのキャリアプランニングやキャリア・トレーニングの必要性について言及がある(吉田ら, 2012)。JSC (2013) はデュアルキャリアに関する調査研究を行ったほか、トップアスリートへのキャリア支援はJリーグ、日本オリンピック委員会などで行われている(吉田ら, 2012)。

大学においても就活支援などのキャリアサポートを行っている例もあるが(長倉, 2016)、大学生アスリートに特化したキャリア支援はごくわずかである。

また研究においては、大学生アスリートのキャリアをライフスキル獲得や就職活動(清水・島本, 2011)、スポーツ・ライフ・バランス(荒井ら, 2018)、学業との両立意識(束原ら, 2019)などに着目して明らかにした研究は見られるが、一般学生との比較を行った研究はわずかである。

そこで本研究は、大学に所属しながら競技スポーツに取り組む大学生アスリートの進路選択に関する特徴を、一般学生と比較することにより明らかにし、大学生アスリートの進路選択においてどのような支援が求められているのか検討することを目的とした。

2. 方法

2-1. 対象者

本研究では、中国地方および東海地方にある2大学に所属する1-4年生を対象とした。研究分担者が担当する授業にてアンケート回答の呼びかけを行い、同意の得られた者からGoogle Formsによりオンライン上で回答を得た。

2-2. 尺度

アンケートは、1) 個人的属性、2) 就職活動に関する項目、3) 進路選択に対する自己効力感に関する項目、および4) 進路選択に対する結果期待によって構成されている。

- 1) 個人的属性：(1) 性別、(2) 年齢、(3) 学部、(4) 学年および(5) 現在のスポーツ活動について記述および選択にて回答を求めた。
- 2) 就職活動に関する項目：7種の就職活動について、参加経験の有無を尋ねた。
- 3) 進路選択に対する自己効力感：安達(2001,

2003) は、数多くのキャリア発達研究で援用される社会・認知的進路理論(以下SCCT; Lent et al., 1994)において、将来のキャリア選択行動を予測する上で中心的な役割を果たす自己効力感と結果期待に着目し、大学生の進路発達過程を明らかにした。本研究においても同様に、キャリア未入職者である大学生を対象とするため、援用した。進路選択に対する自己効力感は、安達(2001)によって開発され、(1) 進路選択(10項目)、(2) 問題解決(10項目)、(3) 計画立案(10項目)、(4) 自己適性評価(10項目)および(5) 職業情報の収集(10項目)の5因子(50項目)によって構成されている。「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常によく当てはまる」の5段階で回答を求め、各因子の合計得点を分析に用いた。

- 4) 進路選択に対する結果期待：3)と同様に、安達(2001)によって開発された項目を用いた。SCCTにおいて、結果期待は自己効力感を媒介して職業に対する興味に影響を与える他、直接興味に与える影響も確認されており、自己効力感と同様にその後のキャリア選択行動を予測する重要な因子であるとされている。進路選択に対する結果期待は4項目で構成され、回答は「1. 全く当てはまらない」から「5. 非常によく当てはまる」の5段階で求め、合計点を分析に用いた。

2-3. 統計処理

分析には、SPSS version 25を用いた。分析方法として、1) 大学生アスリートと一般学生の進路選択に対する自己効力感および結果期待を比較するため、スポーツへの取り組みを独立変数、進路選択に対する自己効力感の5因子および結果期待を従属変数とし、対応のないt検定を行った。また2) 男女の進路選択に対する自己効力感および結果期待を比較するため、性別を独立変数、進路選択に対する自己効力感の5因子および結果期待を従属変数とした対応のないt検定を行った。なお、性別においてその他を選択した者は分析から除外した。さらに、3) 学年ごとの進路選択に対する自己効力感および結果期待を比較するため、学年グループ別(1, 2年生グループと3, 4年生グループ)を独立変数、進路選択に対する自己効力感の5因子および結果期待を従属変数とした対応のないt検定を行った。最後に、4) 大学生アスリートと一般学生の就職活動の参加経験の有無を比較するため、 χ^2 検定を行った。なお、有意水準は5%未満とした。

3. 結果

464名から回答が得られ、年齢の平均は 19.8 ± 0.9 であった。

3-1. 個人的属性

表1に、対象者の学部、学年、性別、現在のスポーツ活動の単純集計の結果を示した。対象者が所属する学部について、65.5%がスポーツ系の学部に、34.5%がその他の学部に所属していた。学年については2年生が62.7%と最も多く、次いで1年生が20.3%、3年生は9.7%、そして4年生が7.3%であった。性別は、男性70.0%、女性が29.5%、その他0.4%であった。また、現在のスポーツの関わり方については、競技スポーツとして関わっている対象者が59.7%であり、趣味・レクリエーションなどとして関わっている場合および現在は関わっていないなどの対象者は合わせて40.3%であった。今後は、競技スポーツに関わる学生を大学生アスリート、レクリエーションや趣味として関わっている学生または現在スポーツに関わっていない学生を一般学生とする。

表1. 対象者の個人的属性

	n	%
学部		
スポーツ系	304	65.5
その他	160	34.5
学年		
1年生	94	20.3
2年生	291	62.7
3年生	45	9.7
4年生	34	7.3
性別		
男	325	70.0
女	137	29.5
その他	2	0.4
現在のスポーツの関わり方		
競技スポーツとして	277	59.7
趣味などその他	187	40.3

3-2. 尺度の信頼性

進路選択に対する自己効力感および結果期待の内的整合性を確認するため、クロンバックのアルファ(α)の値を算出した。その結果を表2に示す。進路選択に対する自己効力感を構成する5因子において、進路選択($\alpha = .88$)、計画立案($\alpha = .89$)、問題解決($\alpha = .84$)、自己適性評価($\alpha = .90$)、職業情報の収

集($\alpha = .88$)全てにおいて基準値である $\alpha = .70$ を超えた。また、進路選択に対する結果期待においても $\alpha = .87$ となり基準値を超えたため、内的整合性が確認された。

3-3. 大学生アスリートと一般学生の進路選択に対する自己効力感と結果期待の比較

大学生アスリートと一般学生の進路選択に対する自己効力感と結果期待を比較するために行ったt検定の結果を表3に示す。その結果、学生アスリートの方が一般学生と比べ、有意に低い結果期待の得点を示した($t = -3.094$, $p < .01$)。

3-4. 男女の進路選択に対する自己効力感と結果期待の比較

男女の進路選択に対する自己効力感と結果期待を比較するために行ったt検定の結果を表4に示す。その結果、全ての項目において、有意差は見られなかった。

3-5. 学年グループ別による進路選択に対する自己効力感と結果期待の比較

学年グループ別(1, 2年生グループと3, 4年生グループ)の進路選択に対する自己効力感と結果期待を比較するために行ったt検定の結果を表5に示す。その結果、3, 4年生グループの方が1, 2年生グループと比べ、有意に高い結果期待の得点を示した($t = -2.036$, $p < .05$)。

3-6. 大学生アスリートと一般学生の就職活動参加経験の比較

大学生アスリートと一般学生の就職活動経験の有無を比較するために行った χ^2 検定の結果を表6に示す。就職活動として設定した7つのうち、企業説明会($\chi^2 = 31.883$, $df = 1$, $p < .001$)、就職セミナー($\chi^2 = 28.224$, $df = 1$, $p < .001$)、インターンシップ($\chi^2 = 10.083$, $df = 1$, $p < .01$)において、一般学生と比べ、大学生アスリートの参加が有意に少ない割合であることが明らかとなった。

4. 考察

本研究は、大学に所属しながら競技スポーツに取り組む大学生アスリートの進路選択に関する特徴を、一般学生と比較することによって明らかにし、大学生アスリートの進路選択においてどのような支援が求めら

表2. 各項目および因子の平均値, 標準偏差, 信頼性係数 α

質問項目	M	(SD)	
進路選択	38.51	(6.55)	$\alpha = .88$
将来の職業を決定し、その後は職業選択について悩まない	3.57	(1.04)	
職業生活で何を重要視するのかを明確にする	3.96	(0.88)	
将来どういう仕事をしたいのか具体的に挙げてみる	3.91	(0.96)	
理想のライフスタイルにあった職業を選択する	4.00	(0.88)	
自分が最も適している職業領域を確立する	3.74	(0.94)	
自分の興味にあった職業を選択する	4.07	(0.85)	
現在考えているいくつかの職業から1つに絞り込む	3.63	(1.05)	
自分の能力に見合った職業を選択する	3.98	(0.89)	
自分にとって理想的な職業とは何かを確立する	3.79	(0.97)	
人との接触を主とする職業に就くのか、主に物や情報を扱う職業に就くのかを決定する	3.85	(0.92)	
計画立案	36.78	(7.10)	$\alpha = .89$
将来の職業のために在学中やっておくべきことの計画をたてる	3.69	(0.98)	
将来仕事で活かせるように働く経験（アルバイトやボランティアなど）を積む	3.97	(0.94)	
将来の仕事において役立つと思われる免許・資格取得の計画をたてる	3.71	(0.99)	
将来の職業を念頭において授業の履修計画をたてる	3.69	(1.04)	
人生の目標を明らかにし、それに従って職業計画を組み立てる	3.75	(.095)	
志望職業の実現に向けて就職活動の計画を念入りに立てる	3.60	(0.97)	
希望通りの職業活動ができなかったときの対象法を考えておく	3.65	(0.99)	
これからの5年間について目標に向けた計画をたてる	3.41	(1.12)	
就職時の面接でうまく対応する方策を考える	3.71	(0.97)	
職業計画に無理が生じた場合、柔軟に計画を修正できるようにしておく	3.59	(0.98)	
問題解決	37.18	(6.20)	$\alpha = .84$
失敗や挫折があっても希望する職業に就くために努力を続ける	3.92	(0.91)	
志望職業に就くためには試験や面接がうまくいかなくても再度チャレンジする	3.88	(0.88)	
困難な問題が生じて目標とする職業に就くために頑張る	3.80	(0.87)	
就職活動中にトラブルがあった時はうまく対処する	3.58	(0.97)	
好きな仕事に就くためなら遠近や地域を問わず、どこでも移動する	3.53	(1.19)	
志望職業に両親や友人が反対しても、説得して理解を得る	3.76	(0.94)	
たとえ長い時間や労力がかかっても、将来の職業のためになるなら知識や技術を身につける	3.78	(0.95)	
希望していた職業が自分に合わないと思えばはっきりと拒否する	3.73	(0.94)	
第一希望が叶わなかった場合、すぐに頭を切り替える	3.42	(1.09)	
欲求不満を感じても、志望職業に就くために粘り強く頑張る	3.77	(0.94)	
自己適性評価	38.73	(6.48)	$\alpha = .90$
将来、どのような人生を送りたいかを明確にする	3.93	(0.90)	
自分がどのような職業分野に向いているかを理解する	3.75	(0.99)	
自分の適性や能力を正確に把握する	3.84	(0.88)	
自分の興味にあった職業分野をいくつか挙げる	3.79	(0.96)	
自分の性格や興味を性格に判断する	3.89	(0.86)	
仕事をする上での自分の長所と短所を理解する	3.90	(0.90)	
自分の将来の目標と、これまでの経験を関連させて考える	3.88	(0.91)	
職業選択の際、何を重視して職業を選ぶかを明確にする	3.93	(0.89)	
自分の性格にあう職業分野を明確にする	4.08	(0.85)	
能力や適性を活かせる職業分野をいくつか挙げる	3.74	(0.91)	
職業情報の収集	37.21	(6.85)	$\alpha = .88$
自分が興味のある職場を訪問し、必要な情報を収集する	3.74	(0.95)	
新聞・雑誌・テレビ・インターネットなどを利用して職業情報を調べる	3.84	(0.99)	
関心のある職業に就いている人から仕事について話を聴く	3.82	(1.02)	
将来携わりたい職業の仕事内容を調べる	3.94	(0.86)	
就きたい職業に必要な資格・免許・技術などについて調べる	3.91	(0.98)	
興味ある領域の会社や組織に関する情報を入手する	3.71	(1.01)	
興味ある組織では、どのような人材を必要としているのかを調べる	3.73	(0.94)	
就職課や大学の教員から職業に関する情報を得る	3.74	(1.00)	
現在の日本の求人動向を把握する	3.34	(1.04)	
就職課や図書館などで各種資料を活用して職業に関する情報を得る	3.44	(1.12)	
進路選択に対する結果期待	15.73	(2.86)	$\alpha = .87$
仕事についていろいろ勉強すれば、よりよい職業選択が出来るだろう	3.94	(0.87)	
自分の興味や能力を理解すれば、よりよい職業選択が出来るだろう	3.93	(0.86)	
仕事でどのような知識や技術が必要となるか分かれば、よりよい職業選択が出来るだろう	3.96	(0.80)	
じっくり時間をかけて職業情報の収集を行えば、よりよい職業選択に何が必要なのか分かるだろう	3.91	(0.84)	

表3. 大学生アスリートと一般学生の進路に対する自己効力感と結果期待

		大学生アスリート (n=277)		一般学生 (n=187)	t	p
進 路 選 択 に 対 す る 自 己 効 力 感	進路選択	M (SD)	38.61 (6.57)	38.36 (6.54)	0.400	n.s.
	計画立案	M (SD)	37.20 (6.89)	36.16 (7.37)	1.561	n.s.
	問題解決	M (SD)	37.46 (6.12)	36.76 (6.23)	1.199	n.s.
	自己適性評価	M (SD)	38.82 (6.38)	38.60 (6.64)	0.357	n.s.
	職業情報の収集	M (SD)	37.58 (6.54)	36.65 (7.27)	1.440	n.s.
	進路選択に対する 結果期待	M (SD)	15.40 (2.77)	16.23 (2.92)	-3.094	**

**p<.01

表4. 男女の進路に対する自己効力感と結果期待

		男子 (n=325)	女子 (n=137)	t	p	
進 路 選 択 に 対 す る 自 己 効 力 感	進路選択	M (SD)	38.78 (6.62)	37.91 (6.39)	1.313	n.s.
	計画立案	M (SD)	36.95 (7.25)	36.47 (6.75)	0.664	n.s.
	問題解決	M (SD)	37.50 (6.16)	36.43 (6.29)	1.686	n.s.
	自己適性評価	M (SD)	38.93 (6.45)	38.23 (6.58)	1.068	n.s.
	職業情報の収集	M (SD)	37.51 (7.00)	36.55 (6.48)	1.379	n.s.
	進路選択に対する 結果期待	M (SD)	15.80 (2.81)	15.58 (2.95)	0.753	n.s.

表5. 学年グループ別の進路に対する自己効力感と結果期待

		1・2年生 (n=385)	3・4年生 (n=79)	t	p	
進 路 選 択 に 対 す る 自 己 効 力 感	進路選択	M (SD)	38.36 (6.25)	39.20 (7.88)	-0.890	n.s.
	計画立案	M (SD)	36.63 (6.83)	37.53 (8.30)	-0.909	n.s.
	問題解決	M (SD)	37.01 (6.02)	38.00 (6.98)	-1.294	n.s.
	自己適性評価	M (SD)	38.49 (6.25)	39.89 (7.44)	-1.555	n.s.
	職業情報の収集	M (SD)	37.14 (6.56)	37.53 (8.16)	-0.398	n.s.
	進路選択に対する 結果期待	M (SD)	15.61 (2.82)	16.33 (2.99)	-2.036	*

*p<.05

表6. 大学生アスリートと一般学生の就職活動経験

		あり			なし			χ ² 検定
		観測値	(期待値)	調整済み残差	観測値	(期待値)	調整済み残差	
OB/OG 訪問	大学生アスリート	33	(37.0)	-1.1	244	(240.0)	1.1	χ ² =1.246 df=1 n.s
	一般学生	29	(25.0)	1.1	158	(162.0)	-1.1	
	合計	62			402			
企業説明会	大学生アスリート	28	(51.3)	-5.7	249	(225.7)	5.7	χ ² =31.883 df=1 p<.001***
	一般学生	58	(34.7)	5.7	129	(152.3)	-5.7	
	合計	86			378			
就職 セミナー	大学生アスリート	46	(70.4)	-5.3	231	(206.6)	5.3	χ ² =28.224 df=1 p<.001***
	一般学生	72	(47.6)	5.3	115	(139.4)	-5.3	
	合計	118			346			
インターン シップ	大学生アスリート	13	(22.1)	-3.2	264	(254.9)	3.2	χ ² =10.083 df=1 p<.01**
	一般学生	24	(14.9)	3.2	163	(172.1)	-3.2	
	合計	37			427			
面接などの 選考	大学生アスリート	28	(33.4)	-1.6	249	(243.6)	1.6	χ ² =2.449 df=1 n.s.
	一般学生	28	(22.6)	1.6	159	(164.4)	-1.6	
	合計	56			408			
教員採用 試験の勉強	大学生アスリート	24	(23.9)	0.0	253	(253.1)	0.0	χ ² =0.002 df=1 n.s.
	一般学生	16	(16.1)	0.0	171	(170.9)	0.0	
	合計	40			424			
教員採用 試験の受験	大学生アスリート	15	(13.1)	0.8	262	(263.9)	-0.8	χ ² =0.691 df=1 n.s.
	一般学生	7	(8.9)	-0.8	180	(178.1)	0.8	
	合計	22			442			

れているのか検討することを目的とした。まず進路選択に対する自己効力感と結果期待の得点を比較したところ、大学生アスリートは一般学生に比べ、進路選択に対する結果への期待が低いことが明らかとなった。一方で、自己効力感において有意差は無いものの、5因子全てで大学生アスリートが一般学生を上回っている。大学生アスリートが一般学生と比較し同程度もしくはやや高い自己効力感を持っているが、結果期待は低い原因として、大学生アスリートは学生生活の多くの時間をトレーニングなどの競技活動に費やしており、就職活動など競技活動以外に関心が向いていないことが原因として考えられる。実際に、大学生アスリートの大学生活において、競技活動が勉強、プライベートを上回っており、競技中心の生活を送っていることが明らかである(古谷・栗木, 2015)。そのような大学生活において、競技生活を上回る他の活動に価値を見いだせていないため、就職活動に充てる時間を十分に持っていないことが考えられる。

また、この現状は実際のキャリア選択行動にも現れており、企業説明会、就職セミナー、インターンシップ参加経験ありの割合は、大学生アスリートが一般学生よりも有意に低い結果となった。大学での競技活動は部活単位で行われていることが多いため、チーム練習を抜けることへの抵抗や、競技活動を優先させるため就職活動に参加できていない現状が考えられる。一

方で、上野(2014)によると高校生の運動部活動への参加経験や競技状況スキルが、ライフスキルを媒介して、進路を選択・決定しようと模索する過程(行動)を指す教育進路成熟に寄与することが明らかになっている。このように、高校までの運動部活動は進路選択行動にプラスの影響を与えているため、大学における競技活動のあり方や大学生アスリートに対する今後の大学教育のあり方について、より一層議論していく必要があると考える。

男女における自己効力感および結果期待において、有意な差は見られなかったが、尺度の測定値においては、自己効力感と結果期待ともに女子が男子を下回っていた。歴史的に男性中心の職業では、女性の自己効力感や結果期待は男性と比べ低いと指摘されているが(Hackett & Betz, 1981)、大学生間においても、女子学生の自己効力感や結果期待は男子学生と比べ低い可能性が示唆された。自己効力感が低い結果、結果期待も高まりにくいと考えられるため、女子学生に特化した自己効力感や結果期待を高めることができるような働きかけが必要である。

最後に、学年グループ別の比較では、3, 4年生グループが1, 2年生グループと比較し有意に高い結果期待を持っていた。実際に就職活動を経験した4年生や、就職活動のための準備を進めている3年生と比べ1, 2年生の自己効力感や結果期待が低いことは予想

に反しないが、日本経済団体連合会は、「採用選考に関する指針」を廃止することを決定している。今後大学生の早い段階から、就職活動に取り組む必要性も増してくると考えられるため、大学1,2年生から進路選択に対する自己効力感と結果期待を高めるための働きかけを行っていく必要がある。

5. 今後の課題

今後は、キャリア選択行動につながると思われる自己効力感および結果期待がどのように高まるのかを解明していくことが必要であると考えられる。特に大学生アスリートに対し、どのような場合に自己効力感と結果期待を高く持つことができるかに関する質問紙を作成し、詳細な研究を実施する。また、スポーツ活動状況や競技能力が進路選択に関する自己効力感や結果期待に与える影響も考えられるため、実際の競技活動の内容や継続年数、コーチなどからの働きかけなどとの関連を明らかにすることも必要である。

今後は対象者を幅広い競技レベル、種目に拡大し、競技レベルごとや種目ごと、チーム競技と個人競技といった比較を行うことが必要である。また、女性コーチが少ない現状を考える上で、男女の差も比較、検討することで女性コーチ育成の一助となることが期待される。

アスリートのセカンドキャリア、デュアルキャリアが取り沙汰される中、競技以外の活動に目を向けたり、セカンドキャリア、デュアルキャリア教育を行ったりすることが進められている。しかし、トップアスリートになればなるほど、競技に対し高いコミットが要求され、トレーニング以外の時間もなかなか他の活動に取り組めない現状もある。そこで、競技やトレーニング場面において、選手の自主性を育成することにつながることを期待される自己調整学習能力を高めることで、セカンドキャリアとしてコーチを考えるきっかけとなることを期待される。さらに、コーチ以外のセカンドキャリアを選択する場合でも、自主的にキャリアを選択する能力を養うことができると考えられる。何より、トレーニングにおいて主体的に取り組む能力が身に付くことで競技力向上にも寄与することから、今後は自己調整学習能力を高めるコーチの働きかけについての研究も、併せて行っていくことも有用であると考えられる。

参考・引用文献

1) 安達智子 (2001) 大学生の進路発達過程 - 社会・

認知的進路理論からの検討 - 教育心理学研究, 49, 326-336.

- 2) 安達智子 (2003) 大学生の職業興味形成プロセス - 手段性・表出性, 自己効力感, 結果期待の役割について - 教育心理学研究, 51, 308-318.
- 3) 荒井弘和・深町花子・鈴木郁弥・榎本恭介 (2018) 大学生アスリートのスポーツ・ライフ・バランスに関連する要因 - デュアルキャリアの実現に向けて - スポーツ産業学研, 28 (2), 149-161.
- 4) 古谷駿・粟木一博 (2015) デュアルキャリアに関する学生アスリートの意識と大学における支援の在り方についての研究. 仙台大学大学院スポーツ科学研究科修士論文集, 16, 125-131.
- 5) Hackett, G., & Betz, N.E. (1981) A self-efficacy approach to the career development of women. *Journal of Vocational Behavior*, 18, 326-339.
- 6) 一般社団法人大学スポーツ協会 (online) 設立理念. 最終閲覧日: 2019年12月24日)
<https://www.univas.jp/about/#message>
- 7) Lent, R.W., Brown, S.D. & Hackett, G. (1994) Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance. *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- 8) 長倉富貴 (2016) アスリート学生支援についての一考察. *経営情報学論集*, 22, 19-41.
- 9) 中村哲也 (2017) 日本版NCAA構想の問題点と課題 (特集: 大学スポーツの産業化). *現代スポーツ評論*, 36, 53-65. 創文企画.
- 10) 日本スポーツ振興センター (2014) 「デュアルキャリアに関する調査研究」報告書.
- 11) 小野雄大・友添秀則・根本想 (2017) わが国における大学のスポーツ推薦入学試験制度の形成過程に関する研究. *体育学研究*, 62, 599-620.
- 12) 旺文社 (2019) 旺文社調査報告 大学入試における「スポーツ推薦」の実態調査 回答校の約4割で「スポーツ推薦」を実施!。(最終閲覧日: 2019年12月24日)
<https://www.obunsha.co.jp/news/detail/566>
- 13) 清水聖志人・島本好平 (2011) 大学生トップアスリートのキャリア形成とライフスキル獲得との関連. *日本体育大学紀要*, 41 (1), 111-116.
- 14) 高城佳那・三倉茜・小笠原悦子 (2019) コーチになれるという自己効力感とスポーツ版自己調整学

能力との関係 -女子バスケットボール選手を対象として-。スポーツと人間：静岡産業大学論集 3（2），43-49.

- 15) 東原文郎・横田匡俊・舟橋弘晃・澤井和彦・長倉富貴・石川勝彦・中村祐介・村島夏美（2019）学生アスリートにおける学業と競技の両立意識の実態とその背景。スポーツ産業学研究, 29（4），281-291.
- 16) 上野耕平（2014）ライフスキルの獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響。スポーツ教育学研究, 34（1），13-22.
- 17) 吉田章・佐伯年詩雄・河野一郎・田嶋幸三・菊幸一・大橋仁（2006）トップアスリートのセカンドキャリア構築に関する検討（第1報）。筑波大学体育科学系紀要, 29, 87-95.

付記

本研究にお力添えをいただいた大阪教育大学名誉教授，NPO法人コミュニティ総合カウンセリング協会副理事長大日方重利氏に心から感謝の意を表す。本研究は2019年度静岡産業大学特別研究支援「大学生アスリートの自己調整学習能力と進路選択における自己効力感との関係」の成果の一部である。